

健康教育[®]

No.205

— 健康なくして教育はありえない —



子ども達の「聞く」力を伸ばす 土居 正博

「自分でできた!」を育む片づけの仕組みづくり

～親子で実践しながら子どもの「生きる力」を身につける～ 田中 ゆみこ



写真提供:アスク舞浜保育園(千葉県 浦安市)

「健康教育[®]」

——健康なくして教育はありえない——

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。



薬学博士・河合亀太郎

子どもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目 次

3	子ども達の「聞く」力を伸ばす
9	「自分でできた!」を育む片づけの仕組みづくり ～親子で実践しながら子どもの「生きる力」を身につける～
15	あらまし

子ども達の「聞く」力を伸ばす

東京書籍小学校国語教科書編集委員
川崎市公立小学校 教諭

土居 正博



はじめに

子どもが保育園や幼稚園、小学校といった場所に通うようになり、保護者ではない他の大人（指導者）から指導を受けるようになると、それまでよりも「話を聞く」場面が急激に増えます。正確に言うと、大人数で一人の話を聞く、という場面です。このような場所では、指導者が一人で、多くの子どもを指導するという構図から、一人の指導者の話を聞いて、子ども達が活動することが主になるからです。

これまで、保護者と一対一、あるいは大人の方がが多い状況で子ども達は自分だけに向けて話してもらって聞いていたことが多いですから、子ども達にとっては大きく状況が変わります。私は、公立小学校で教員をしています。そんな私から見て、やはり子ども達の学校生活では、どうしても話を聞く場面が多くなるな、という印象です。

このようなことを踏まえると、子ども達にとって、集団や社会に属して生活する上で「話を聞く力」は非常に重要だと言えます。

授業を「聞く」!?

勤務校での保護者面談などで保護者の方々と接していて、一度は耳にするのが、「うちの子、先生のお話をしっかり聞いていますか?」や「うちの子、しっかり授業聞いていますか?」という保護者のお声です。一般的にも、学校に通う=指導者の話をしっかり聞く、という印象は強いようです。

現在、小学校の学校現場では、現行学習指導要領の方針に則って「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されています。子ども達が学びの主体となり、自分なりの課題をもって他者と対話をしながら学習するような授業づくりを心掛けています。ですから、授業中に教師の一方的な説明をひたすら聞く、という場面はだいぶ少なくなっています。それでも、多くの保護者からすると、授業は「聞く」ものであると捉えられていることが、先の言葉から分かります。



学校での「聞く場面」の多さ

それでは、実際には、子ども達は学校生活の中でどれくらい聞く場面があるのでしょうか。

例えば、以下はある日の私のクラスでの子ども達の生活です。

朝の会で当番や教員(私)から、一日の予定や注意点を聞く。



1時間目理科。教員から実験の手順及び注意点を聞き、実験をする。



2時間目体育。バスケットボールの試合のやり方や流れについての説明を聞き、試合をする。

中休み 実行委員での活動。教員から実行委員の主旨の説明を聞き、どんな活動をするか具体的に話し合う。

3時間目国語。説明文の文章構成について考えて話し合い、教員の説明を聞く。

4時間目算数。分数の割り算の計算の仕方を考え、説明しあい、教員の説明を聞く。

帰りの会。明日の予定の説明を教員から聞く。

4時間授業の日を例に挙げてみましたが、上に挙げただけでも、子ども達が「話を聞く」場面がいかに多いかがお分かりいただけたでしょう。しかも、ここに挙げたのは一部に過ぎず、正確には、もっとたくさんの「話を聞く」場面が存在していると考えられます。

教員の立場から考えてみても、子ども達にこちらからの話を聞かせないで、学級経営や授業を進めていくことは、想像することはでき

ません。一人で、数十人の子ども達を預かっているという状況においては、指導者の話を子ども達に聞いてもらう場面は、どうしても避けては通れないものだと言えます。

「話を聞ける子」は学校に適応しやすく、力を伸ばしていきやすい

このように、学校現場において「話を聞く」場面は多く存在していることから、話をしっかり聞ける子は、学校に適応しやすいと言えるでしょう。

私がこれまで受け持ってきた子ども達のことを思い起こしてみても、しっかり話を聞くことが出来る子は、学校生活に適応し、授業や行事においても自分の力を存分に発揮していました。話を聞く力があるから、学校に適応できるのか、学校に適応できる子達だから話を聞く力が高いのかは、定かではありません。ですから、これは「鶏が先か、卵が先か」のような話ではあります。しかしながら、基本的には子ども達はある程度の年齢になったら学校等の集団や社会に属することを鑑みると、「話を聞く力」を高めることは、子ども達が集団に適応し、活躍していくために、重要な要素の一つであることは間違いないでしょう。

話をしっかり聞ける子達は、大人からの話の内容を吸収し、語彙力や理解力、読解力等も伸びていきます。私のこれまでの小学校教員としての経験から、「話を聞ける子」は自分の力を存分に伸ばしていく子が多いと考えています。



「話を聞ける」とは

それでは、しっかり話を聞ける子とは、どんな子なのでしょうか。ここでは、理論的に解説するというよりも、私がこれまでの小学校教員生活で見てきた「話を聞ける」子ども達の具体的な姿をご紹介しましょう。

◆ 聞くことに集中できる

最も基礎的で重要なことです。話をしっかり聞いている子は、誰かが話している時に、誰かとおしゃべりをしたり、手いたずらをしたりせずに、聞くことに集中することができます。これは、「力」というよりも「姿勢」や「心構え」といった方が正確かもしれません。

しかし、このような姿勢が備わっていないければ、その先の力を育てることは難しく、話を聞く力を伸ばすための不可欠な要素と言えます。



◆ 聞いたことを記憶できる

集中して話を聞いて、更に聞いたことがある程度覚えていられることが重要です。これは、相手の話を一文字残らず完璧に記憶することではなく、自分の言葉で話の内容を再現できればよいのです。



◆ 話の内容を具体的にイメージし理解できる

相手の話の内容を覚えているだけでなく、頭の中で具体的にイメージし、話の内容を理解できこそ、しっかり聞けていえると言えます。



◆ 相手の思いを汲み取れる

更に、話している相手の言外での意を汲め

るようになると、聞き手として素晴らしいと言えます。相手がなぜ、どんな思いでこのような話をしているのか、想像できることは、話を聞いて単に情報を得るだけでなく、相手とのコミュニケーションを円滑にします。



どのようにこれら之力を伸ばしていくか

それでは、このような聞く力を伸ばしていくにはどうすればいいでしょうか。ご家庭や幼稚園、小学校などで気軽に取り組める指導方法やそのポイントをご紹介します。

聞くことに集中できる子に育てるために

◆ 周りの大人が話をしっかり聞くこと

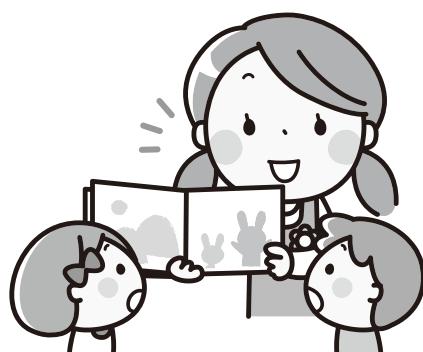
第一に、周りの大人が、その子の話にしっかりと耳を傾けることです。子どもにとって周りの大人の影響は非常に大きいものです。そして、大人の「言葉」以上に「姿勢」が子どもに影響を与えています。教育界で有名な言葉の一つに「ヒドゥンカリキュラム」という言葉があります。これは、教師から意図的に指導される内容ではなく、教師の姿勢や態度などから意図せず子ども達が学ぶ内容のことを指します。このヒドゥンカリキュラムは、意図的な指導と比べても、実は比重がかなり大きいとされています。



す。いつも大人が子どもに「話をきちんと聞きなさい」と伝えていても、その大人が子どもの話をいい加減に聞いていれば、「人の話はいい加減に聞いてもいいんだ」と子どもは学んでしまうのです。ですから、まずは周りの大人が率先垂範して、子どもの話をしっかり聞く姿勢を見せていくことが大切です。子どもは、自分の話を十分聞いてもらえないとき、相手の話を聞こう、とはならないのです。

◆ 集中して話を聞く時間をつくる

第二に、集中して話を聞く時間を意図的につくることです。例えば保育園や幼稚園、学校などでは、先生が自分の話をすると良いでしょう。子ども達にとって、先生の個人的な話は大好きで、興味津々で聞きます。私が現在担任している小学6年生でも、「昔、先生も実はね…」などと子どもの頃の話などを話し始めると、多くの子が目を輝かせて聞いてくれます。これが更に年齢が低い子達であればなおさらです。そして、集中して話を聞く時間をつくり、重ねていくのです。ご家庭であれば、読み聞かせが圧倒的におススメです。子ども達は読み聞かせが大好きです。読み聞かせは、読書教育の観点から多くのご家庭で取り入れられていると思いますが、子ども達の「話を聞く力」を育てるという観点から見ても、非常に有効です。ひとまとめりのお話を10分間ほど聞くことになるからです。集中してお話を聞けたら、「とっても集中して聞けたね。すごいよ。」など



とたくさん褒めてあげて、楽しく終わりましょう。

総じて、周りの大人が、繰り返し繰り返し子ども達に「話を聞けることはすごく大切なことだよ。」と言葉だけでなく自身の姿もあわせて伝え続けていくことが、子ども達の話を聞く姿勢を育てる上で最も重要です。

話を聞く力の質を高めていくために

◆ お話を読み聞かせをした後の「質問」で

子ども達の聞く力を高める

聞く姿勢が育ってきたら、徐々に聞く力の質も高めていきましょう。そのために有効なのは、先生のお話やご家庭での読み聞かせをした後に簡単な「質問」をすることです。

先に、「記憶できる」「イメージして理解できる」「思いを汲み取れる」という3つの具体的な「聞く力」の段階を示しました。それらに合わせて、質問をするわけです。

例えば、子ども達の「記憶できる」力を伸ばしたい場合、先生がお話をした後、そのお話を思い出させる質問をします。「(お話をした後)それではクイズです!先生は、土日にどこに行ったでしょうか!?」「先生はそこで何を食べたでしょうか?」などです。多くの子ども達が忘れてしまっていたら、もう一度お話をしても良いでしょう。楽しみながら子ども達の聞く力を高めていくことができます。

◆ 徐々にレベルを高めていく

また、教育活動の中での先生から指示を出す場面で、「今から使う物を言います。はさみ、のり、色鉛筆です。さて、これから使う物は何でしょうか。言える人?」などと尋ねて言わせるという方法も考えられます。教育界では、「一時一事」という言葉があるくらい、一度に一つの行動の指示をするということが基本になっています。ですが、それはあくまでも「基本」です。少しづつ子ども達に聞かせる量を増やし、

記憶できる量を増やしていく指導が必要だと私は考えています。

昨年、息子の幼稚園で参観したことでした。先生は、「今から言う物を机の上に出してね。はさみとのりと色鉛筆です。出したら、折り紙を切ってください。ごみはこちらに捨てに来てね。その後、折り紙に絵をかきましょう。」と一度に三つくらいの行動の指示を出していて、驚きました。更に驚いたのは、幼稚園の子ども達が、その指示で難なく動いていたことです。私の感覚では、その指示は小学1年生に伝えるよりも量が多く、難しいものでした。ですが、息子が通う幼稚園では、日ごろのご指導の成果で、子ども達の「聞く力」、とりわけ「記憶する力」を伸ばしてくださっていたのでした。この時、私は我々教師の指導如何で、子ども達の「聞く力」は伸ばしていくけるのだな、と確信したのでした。子ども達が話を聞いて覚えていられたかどうかは、「質問」をし、話させることで分かります。ですから、教師は、話や指示をした後、子ども達に「質問」をし、子ども達がどれくらい話せるかその様子を見ながら、徐々に話や指示の量を増やしていくようにすると良いでしょう。

◆ 家庭でも読み聞かせや話をした後に「質問」

をすることで楽しく聞く力を伸ばせる

更に、ご家庭においてもこの「質問」は活用

可能です。例えば、読み聞かせをした後、「誰が出てきたかな?」とか「最後、○○はどうなったの?」などとお話の内容に関して覚えているかどうか「質問」するのです。単に読み聞かせをするだけよりも、親子で本の話が出来て、楽しみながら聞く力を高めることができます。また、土日などのお休みの予定を子ども達に伝えた後、「今日は初めに何をするでしょう?」などと「質問」をして子どもに話してもらうのも良いでしょう。クイズ感覚で取り組めます。

◆ 「質問」の内容を育てたい力に合わせて変化させる

ここでは、「記憶できる」力を高めるための「質問」を例に挙げましたが、それが「具体的にイメージして理解できる」力や「思いを汲める」力に変わっても原理は同じです。「質問」の内容を育てたい力に合わせて変化させなければよいのです。下に一例を挙げておきます。質問しながら、楽しく子ども達の聞く力を高めてください。

「具体的にイメージして理解できる」→「(先生が話をした後に)先生は山の頂上からどんな景色を見たと思う?(話の内容を具体的にイメージさせる質問をする)」「(読み聞かせをした後に)この時、○○はどんな風にこの言葉を言ったのかな?なりきって言ってみて。」

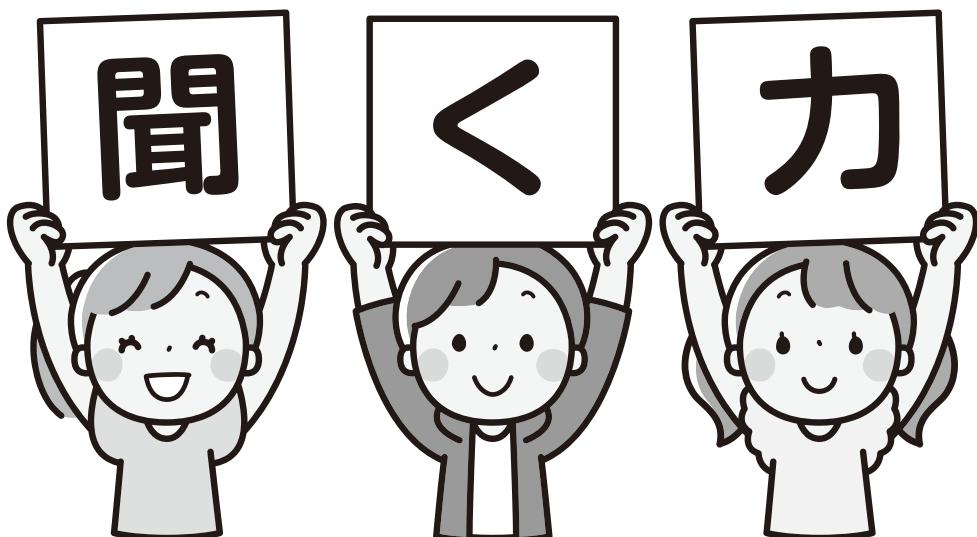
「思いを汲める」→「(先生が話をした後に)



先生は、この時どんな気持ちだったと思う?」
「先生は、なんでこんな話をしたのだと思う?」
「(読み聞かせをした後に)この時、○○はどんな気持ちだったのかな。」

おわりに

本稿では、子ども達の「話を聞く力」に焦点を当てて、それがいかに重要であるか、そしてどう伸ばすかについて私見を述べました。私達教員は、子ども達がしっかり話を聞けるようになってほしいと願い、日々の指導に当たっています。その願いはきっと保護者の方々も同じでしょう。保育園や幼稚園、小学校と家庭が共に手を取り合って、子ども達の「聞く力」を伸ばしていくようにしていきましょう。本稿がその一助になれば幸甚です。



「自分でできた!」を育む片づけの仕組みづくり

～親子で実践しながら子どもの「生きる力」を身につける～

整理収納アドバイザー1級
親・子の片づけマスターインストラクター

田中 ゆみこ



はじめに

リビングに散らかったおもちゃ、脱ぎ散らかした洋服、床に置いたままのランドセルや園バッグ。「いつになつたら片づけるの?」「早く片づけなさい!」と叫んだ経験は誰しも一度はあるのではないでしょうか?

その一方で散らかっている状態がまったく気にならない子ども。親としては「片づけをすることや部屋を綺麗にすることが当たり前」と思っていますが、子どもは「なんで片づけないといけないの?」というのが本音。その温度差が日常のストレスのもとになりがちです。

でも、ちょっと視点を変えてみてください。実は、片づけは、子どもがこれから社会を生き抜く力を身につけるチャンスでもあるのです。子どもと一緒に楽しみながらその力を育むことができたら、親子の関係はきっとラクになるでしょう。

「片づけなさい!」と声を荒げる前に、子どもが自分で片づけられる仕組みを、一緒に考えてみませんか?本稿では、「自分でできた!」を育む片づけの仕組みづくりをご紹介します。

子どもにとって「片づけ」とは?

片づけは“元に戻す”という意味がありますが、子どもは実は、正しい「片づけ方」を知りません。大人にとっては「使った物を元に戻す」「散らかった物を整える」という当たり前の行動でも、子どもにとっては難しいことなのです。

わが子が未就学児の時、「食事の前に机や床に散らかったレゴを片づけよう!」と伝えたところ「なんで?」と返されたことがあります。せめて食事の時はスッキリした空間で食べたい私と、食後にレゴの続きを遊びたいからまだ片づけたくない子ども。結局、レゴを別の場所に移動させて食事をすることになりましたが、その時、親と子では片づけに対する認識に大きな温度差があることを実感しました。



少し成長して小学校高学年の時のことです。「ゲームを片づけてから食事にしよう」と伝えると、元に戻す場所がわかっているのにもかかわらず、「めんどくさい」「片づけてほしいならお母さんがやって」と子どもから言われたことがあります。親が片づけるのは簡単ですが、それが当たり前になっては、子どもは『誰かがやってくれる』と考えるようになってしまいます。だからといって、「子どもだから片づけができない」とあきらめるのはまだ早い段階です。

大切なのは、まずは正しい「片づけ方」を子どもに伝えること。そして物を「使う」「選ぶ」「手放す」といった一連の流れの中で、親子と一緒に「どうする?」と考えること。このように一緒に考え、取り組むことで、自然と片づけの力が身についていくのです。

片づけを通して育まれる「生きる力」

片づけを通して育まれるのは、整理収納のスキルだけではありません。子どもが成長して大人になり、社会に出て生きていくうえで大切な「生きる力」が育まれていくのです。親・子の片づけマスターインストラクターとして大きく3つの力を伝えています。私自身の体験をもとに3つの「生きる力」をご紹介します。

(1)自分で選ぶ力(選択力)

片づけが苦手な長男は小学生の時、声をかけないと制服や靴下は脱ぎっぱなし。家でも学校でも忘れ物が多く、「あーあ、また宿題置きっぱなしやわ」「え、また学校から宿題持つて帰ってくるの忘れたの??」と6年間、何度も頭を抱えたことでしょうか?

そのため、片づけに関して長男にはあまり多くを求めずに、これだけは!と思うことを続けてもらいました。それが、「整理」です。

片づけでは、まず「整理」が大事であることをお伝えしています。使っているのか、使っていないのかを「区別」して大切な物を選ぶことです。最初は用紙に「使っている」「使っていない」「迷う」と私が書いて、一つ一つ仕分けをしてもらいました。毎年、毎年、春休みや夏休みの節目で学校から持ち帰ってきた物を「使っているのか、使っていないのか」を区別し、大切な物を選択してきたので、6年間を通して「選ぶ力」がとても身についたように感じました。高校生になった今、この選ぶ力は、整理にとどまらず、クラブ活動、進路、人間関係、ものごとの優先順位を考える力にもつながり、これから的人生で必要となる取捨選択の場面でも大いに役に立つと実感しています。



(2)周りを思いやる心(想像力)

次に「想像力」です。「ここを片づけなかったら、お母さんどう思うだろう?」「このぬいぐるみはどんな大きさのボックスだったら収納できるだろう?」、片づけを通して想像力を働かせ、先のことを見通す力を身につけることができます。

子どもが2人とも小学生の頃、学校から帰ってきて靴下をリビングに脱ぎっぱなしにするのが私の困りごとでした。リビングから洗面所まで歩いて10歩もかかりません。それでも「リビングから洗面所は遠いから」と脱いだ靴下を持って行くことはありませんでした。

そこで「リビングで脱いでよいから靴下を入れるボックスを買いにいこう」と子どもと一緒に100円ショップに行きました。兄弟で相談して購入したボックス。靴下の大きさの割には大きなボックスでしたが、子どもたちが自分で選んだ物だったためか、その日からちゃんと脱いだ靴下をボックスに入れてくれるようになったのです。ちょっと投げ入れても大丈夫なように大きいサイズのボックスにしたとのこと。想像力を働かせて収納ボックスを決めていたことに少し驚きました。

片づけを通して、「自分だけではなく誰かが使いやすいように」「気持ちよく過ごすために」という視点を持つことは大切です。片づけは、周りを思いやる心を育むチャンスでもあるのです。

(3)コツコツやり続ける力(習慣力)

かくいう私も、何かをコツコツと継続するのは正直得意ではありません。だからこそ、子どもたちに「習慣力」を身につけさせることの難しさを感じていました。しかし、「出したら必ず戻す」、「1日1回だけでもよいから片づける時間を作る」といった小さなルールを決めて、一緒に実行し続ける中で、少しづつ変化が生

まれました。

「めんどくさい」「後でやる」といって結局何もしなかったこともありますし、私自身も「今日はもういいかな」と思うこともありました。それでも、「昨日も頑張れたから、今日も少しだけやってみようか」「ここまでできたから、あと一歩!」と、声をかけ、励ましながら続けていました。

そうして、小さな「できた!」を積み重ねていくうちに、子どもたちの心の中に「続けるって気持ちいいね」という前向きな実感が育っていました。片づけを通して身につく習慣力は、例えば宿題や習い事など、日々の様々な場面でもつながることを実感しています。

このように片づけを通して、行動力や、やり遂げる力、選び取る力…たくさんの「生きる力」が身についていくのです。とても素敵なことだとは思いませんか?

子どもが片づけ上手になる 3つのポイント

では、子どもが「自分でできた!」と実感できるようになるには、どんな工夫が必要なのでしょうか?子どもが片づけ上手になる3つのポイントをお伝えします。

(1)「わかりやすさ」がすべての出発点

子どもにとって、「何をどこに戻すか」がわからなければ、片づけはできません。大人が求める“美収納”より、子どもには「見てすぐわかる仕組み」が重要です。ここでは実例をご紹介します。

- 子どもが管理できる量にする
- 学用品は1か所に集約する

POINT
1



- 文字や写真やイラスト付きラベルで見える化する
- 兄弟ごとに“マイカラー”を設定する
(長男=青、次男=赤)

「見てすぐわかる仕組み」は様々です。例えば、洋服の収納においても、ハンガー・引き出し・ボックスなど収納方法はいくつかありますが、大事なことは「子ども一人ひとりに合った方法」を選ぶことです。

実際、我が家や現場サポートで子どもと一緒に物の持ち方・しまい方を考え、「子ども目線でわかりやすい片づけの仕組み」に変えたことで、子どもの行動が自然と変わっていきました。言われなくてもランドセルを定位置に戻すようになり、リビングの机に出しっぱなしだった教科書も、自分で元の場所に戻せるようになりました。

子どもにとって「わかりやすい」片づけの仕組みは非常に大切です。

(2)「選ぶ」経験を重ねる

これは過去の私の失敗談ですが、子どもが小学校3年生の時、幼稚園でもらった絵本を「これはもう読んでないだろう…」と思い、内緒で捨ててしまったことがあります。ある時「お母さん、あの絵本はどこ?」と聞かれ、返す言葉がありませんでした。正直に話すと「勝手に人の物を捨てないでね」と言われたことは今でも忘れられません。

この経験から痛感したのは、「これは使わないからもういらないよね」とすべてを親が管理してしまうと、子どもは「選ぶ」練習をする機会を失うということです。ある時、遊ばなくなつたおもちゃを子どもが自ら友達にあげた後、「やっぱり



POINT
2



POINT
3

あげなきやよかった…」と後悔するようになりました。しばらく泣いていましたが、そうした小さな失敗も、自分で選ぶ経験のひとつとして、非常に大切だと考えています。

先日、現場サポートで小学生の女の子の片づけをお手伝いした時のことです。大好きなぬいぐるみが30個以上もあり、片づけが追いつかない状況でした。そこで「大好きな順番から10個だけにしてみようか」と提案させてもらうと、彼女は意外とスムーズに決めることができ、「もうこれは誰かにあげる」と最終的に少し手放すこともできたのです。

選ぶことは、「手放す」ことにもつながります。このように、何を選び、何を手放すか自分で考える経験が、物への執着心を和らげ、片づけ上手へつながっていくのです。

(3)「できた!」を積み重ねる

「1個だけ戻せた!」「今日は絵本を全部棚にしまえた!」

そんな小さな“できた”を積み重ねていくことが、自信につながります。

未就学児の男の子と片づけをした時、「すごい?」と誇らしげに聞いてきたことがあります。「すごいね!全部戻せたんだね!」と伝えると、「片づけるとママが喜ぶから」と嬉しそうに話をしてくれたのが印象的でした。

子どもにとって、お母さんの喜ぶ姿は大きなモチベーションになり、自己肯定感を育むこともあります。10回言っても1回も聞いてくれない…と「できない」ことに目をむけることもありますが、それでも「できた」を見つけて、小さな成功を一緒に喜び合うことが子どもの成長につながると実感したものです。

園や家庭で今日からできる 片づけのアプローチ

片づけは、家庭だけでなく園や保育の場でも育まれます。家庭や園でできる具体的な方法をご紹介します。

◆家庭で実践できること

- ・「1日1回だけ片づけタイム」を導入遊び終わった後、寝る前など決まった時間に片づける習慣が身につきます。
- ・ゲーム感覚でお片づけ遊び「何分で片づけられるか競争しよう!」と声をかけると、楽しみながら片づけに取り組むことができ、子どものやる気アップにつながります。
- ・おもちゃの“定位置”を一緒に決める子どもに主導権を持たせることで、責任感が育ちます。
- ・「使う・使わない・考え中」ボックスの活用即決できない物を“保留”にできるボックスを作ると、無理なく片づけられるようになります。

◆園や保育の場でできること

- ・遊ぶコーナーに使うものを収納絵画、積み木やままごとなど、遊ぶ場所や遊ぶコーナーに使う物を収納することで、スムーズに片づけてくれるようになります。
- ・制作物は作りかけのまま個人トレーに置いておく月曜日～木曜日はトレーに、金曜日は片づける約束をすることで、メリハリをつけた活動ができます。
- ・「片づけソング」や「タイマー」で楽しく習慣化音楽や時間の区切りで、片づけに対するハードルを下げます。次の活動の10分前には片づけを始めることで園活動がスムーズになります。

・オープン収納、ざっくり収納を取り入れる園庭のままごとは種類関係なく、カゴにざっくり入れることでスムーズに片づけてくれるようになります。

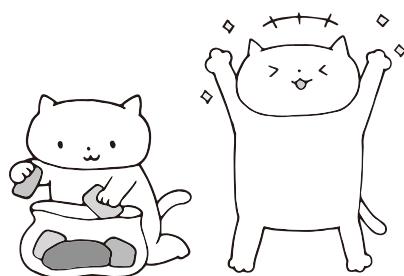
現場サポートで「園では片づけができるみたいだけど、家ではなかなか片づけてくれない…」というお声をよく聞きます。“集団行動だからこそできる”という側面もありますが、そういう場合は、園での収納方法や取り組みをご家庭で取り入れるとスムーズにいく場合もあります。

家庭と園が連携し、「おたより」や「園ノート」などのツールを使って園で取り組んでいる片づけの工夫を家庭に共有することで、子どもの片づけ力をより自然に育んでいくことができるのではないか?

私が変われば、子どもが変わる 見守りと信じる力

園や家庭でできるアプローチをご紹介しましたが、「子どもに自ら片づけられるようになってほしい」という気持ちは、親として当然の願いです。私自身、片づけのプロになる前は、小さい頃から片づけができなければ大人になってから困る。だから子どもが小さい頃にしっかりと身につけてもらわなければいけない!と意気込んでいました。

でも、その気持ちが強すぎて、片づけのハードルを高くした結果、子どもがどんどんできな

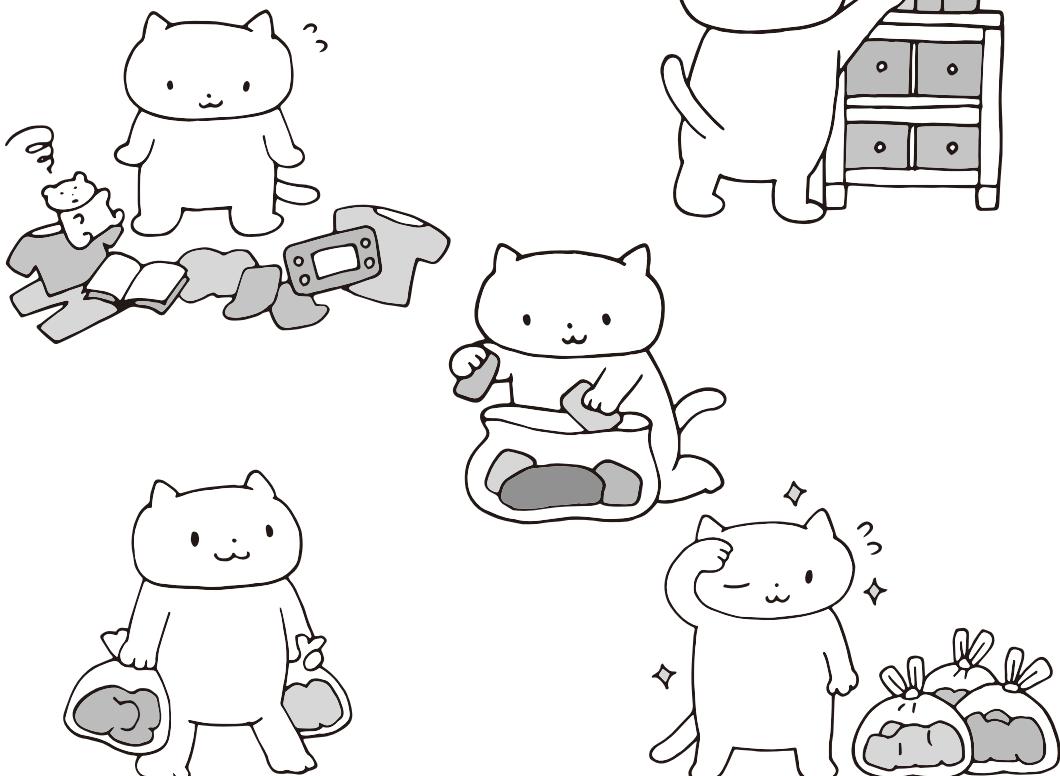


くなり私はイライラ…といったことがありました。子どもに「なぜ片づけをするんだと思う?」と尋ねた時、即答で「お母さんに怒られるから」と言わされたことは今でも忘れられない出来事です。

小さい頃はできていたことが成長する過程で「面倒でやりたくない。」ということもあります。子育ての四訓にもあるように、思春期になると“目を離して心を離すな”が基本です。折を見て片づけの大切さを伝えていく必要はありますが、本人にお任せです。

子どもがどの年代であっても、大切なのは「できる」と信じて見守ること。そしてできなくても、できるまで一緒にとりくみ、片づけを伝え続けること。最初は時間がかかるかも、上手にできなくても、「やろうとしている姿」を認めてあげることです。

「自分が変われば相手が変わる」。親の姿勢や見方が変わると、不思議と子どもも変わってしまいます。



まとめ：片づけは親子のコミュニケーションの場

繰り返しになりますが、片づけは、ただ部屋を綺麗にする作業だけではありません。子どもの心を育て、親子の信頼関係を深める大切なコミュニケーションの場なのです。

完璧を目指す必要はありません。「すぐできることから」「親子で一緒に成長する気持ちで」始めてみませんか? そうすれば毎日のイライラがちょっとラクになるかもしれません。

そして、その小さな一歩が家庭や園、地域へと広がり、無理なく楽しく続けられる「片づけ」の輪へと広がっていくことを願っています。

■執筆者紹介

土居 正博(どい まさひろ)

1988年東京都八王子市生まれ。創価大学教職大学院修了。川崎市公立小学校に勤務。国語教育探究の会会員。全国大学国語教育学会会員。東京書籍小学校国語教科書編集委員。2018年、読売教育賞受賞。2023年、博報賞(奨励賞)受賞。

主な著書に『漢字指導法』(明治図書)、『授業で学級をつくる』(東洋館出版社)、『子どもの聞く力、行動する力を育てる!指示の技術』(学陽書房)等がある。

田中 ゆみこ(たなか ゆみこ)

親・子の片づけマスターインストラクター。年子男子の子育て経験を活かし「家族みんなが笑顔でラクになる暮らし」を発信中。整理収納アドバイザー1級。

対面・オンラインでの整理収納サービスのほか、企業や学校PTAでのセミナーも開催。雑誌・テレビ・ラジオなどのメディア出演多数。Webライターとしても活動し、文章でも片づけの魅力を伝えている。著書『子どもが片づけ上手になる魔法の言葉』。石川県在住。

HP <https://kataduke-plus.net>

■協力園

表紙:アスク舞浜保育園(千葉県 浦安市)

■「健康教育[®]」あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育[®]」。

1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。

読者対象/日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育[®]」をご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。

編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にしていただければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介(例:当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等)、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非当社お問い合わせフォームより問い合わせください。

健康教育に関する問い合わせ(ご意見・ご感想)フォームは、右側の二次元コードよりご利用いただけます。



お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社 「健康教育[®]」編集部

〒164-0001 東京都中野区中野6丁目3番5号

TEL: 03-3365-1110 (代) FAX: 03-3365-1180

E-mail アドレス: genkikko@kawai-kanyu.co.jp

ホームページアドレス: <https://www.kawai-kanyu.co.jp>



「健康教育」のバックナンバーは、右側の二次元コードよりご覧いただけます。

健康教育へのご意見・ご感想をお聞かせください

健康教育編集部では、よりよい紙面づくりを目指し、皆様からの

ご意見・ご感想をお待ちしております。

本誌が、日々の保育や健康づくりのヒントとなれば幸いです。

また、園で実践されている健康や生活習慣に関する取り組み、

子どもたちの様子、日々の工夫なども、もしよろしければ

お聞かせいただけますと嬉しく思います。

「私たちの園ではこんなことを大切にしています」

「日々こんなことを工夫しています」など、

小さなことでも構いませんので、ぜひお気軽にご記入ください。

右下の二次元コードよりご意見フォームにアクセスいただけます。

皆様のあたたかいお声を、心よりお待ちしております。

